

# ナチ体制初期における ミュンツェンベルクの思想と行動

星乃治彦

## The Ideas and Behaviors of Münzenberg in the early Nazi-times

### はじめに

ミュンツェンベルク (Münzenberg, Wilhelm, 1889-1940) ほど多面的な魅力を発した коммуニストはそうそういるものではない。地所管理人の息子としてヒトラーと同じ1889年、エルフルトに生まれた彼は、理髪店見習い、製靴見習いを経て、ドイツ社会民主党 (SPD) の青年教育協会で頭角をあらわすようになった。まさにドイツ労働運動の中で育った世代であった。

第一次大戦中彼は、急進的青年運動の指導者としてスイス亡命中にレーニンと行動をとりにした。大戦直後1919年11月には、共産主義青年運動の指導者として、第1回青年インターナショナルをベルリンで開催した。その後1921年4月の第2回大会もドイツのイェナで開会だけはされたものの、会場に警官隊が流れこみ中止せざるをえなくなった。これ以降、共産主義青年同盟の大会は、ロシア以外で開催することが困難になったという表向きの理由で、指導権はモスクワに移っていった。こうしてミュンツェンベルクの、共産主義青年運動指導者としての上昇の道は、閉ざされてしまった。<sup>(1)</sup>

しかしその後1921年7月、彼には新しい任務が与えられた。レーニンの要請もあって、「飢えたソヴィエト・ロシアを救え」のスローガンとともに、国際労働者救援会 (Internationale Arbeiterhilfe=IAH) を設立することになったのである。ここでいう IAH とは、ロシア救援活動から始まり、各国の救援活動を展開し、天災の際はもちろん、労働者のストライキや反帝運動の支援など多様なヒューマンな活動を展開した組織だった。その設立者でありかつ指導者だったのがミュンツェンベルクだったのである。彼は、全世界に IAH の組織を拡大し、ヒューマニズムの組織化を促進していった。

日本にも、IAHを通して、関東大震災の時に救援物資が横浜まで届けられた。それに、ストライキの続発した大正日本で炊き出しを組織したり、19もの日本の新聞・雑誌にかかわっていた、と言われる。<sup>(2)</sup>

こうした国際連帯の活動をしながら、同時にドイツ国内ではミュンツェンベルクは、共産主義の宣伝の中心人物でもあった。当時としては斬新なモンタージュ技法など最新技術を導入し、ジョン・ハートフィールド (Heartfield, John=Helmut Herzfeld) など新進の芸術家を投入しながら、図版を多く取り入れ、かつ廉価な『労働者イラスト新聞 (Arbeiter Illustrierte Zeitung=AIZ)』を発行していた。たしかに、経営者としての素質もミュンツェンベルクには大いにあったらしく、ヴァイマル共和制下、左翼系出版をおお「ミュンツェンベルク・コンツェルン」とよばれる巨大なマス・メディアのコンツェルンを彼は作り上げるようになったのである。

彼によってコミュニズムは様々な顔をもった。「奇術師の手管と十字軍戦士の献身とを独特の形で組み合わせる — それがヴィリーの手腕だった。」<sup>(3)</sup>しかし、コミュニズム自体は、その後次第にこうした国際連帯、ヒューマニズムの組織、技術的斬新さ、などを喪失していくのであった。

ナチが政権を掌握した後ミュンツェンベルクは、パリに亡命し、反ナチ活動を指導した。ナチに政治的に利用された国会放火事件に関して、『褐書』やロンドンでの対抗裁判などが旺盛に展開されたが、ミュンツェンベルクはそれに積極的に関与していった。またパリにおいて、社会民主党指導者や文化人とドイツ人民戦線を結成していこうとしていた中心人物でもあった。

一方、こうしたミュンツェンベルクをモスクワに本拠地をおく共産主義インターナショナル (コミンテルン) は、コミンテルンの宣伝担当としてモスクワに招請したものの、これをミュンツェンベルクは頑なに拒否した。ミュンツェンベルクの古くからの友人が次々とスターリンの「粛清」の犠牲になっていた中での話である。こうした中でミュンツェンベルクは次第にスターリン型社会主義と距離をとりはじめ、1939年8月独ソ不可侵条約締結の際には、「スターリン、お前こそ裏切り者だ！」と弾劾するにいたるのである。そしてナチ・ドイツのフランスへの侵攻と前後して、謎の死をとげたのであった。こうして見てくると、ミュンツェンベルクについては、ナチズムとスターリン主義と果敢に闘った人物像が浮かび上がってくる。

こうしたミュンツェンベルクの生涯について、注目がまず集まったのは、ミュンツェンベルクの謎の死についてであった。かつての同僚であったケルステンは、ちょうど同時期スターリンの刺客によって殺害されたトロツキー

とのアナロジーで、ミュンツェンベルクもスターリンから殺害された犠牲者としているが、論証をしているわけではない。<sup>(4)</sup> ミュンツェンベルクが本格的に注目を浴びるようになったのは、1960年代半ばから70年代初頭にかけての時期であった。スターリン主義型社会主義でも社会民主主義でもない社会主義の「第三の道」を模索していた独立系左翼がミュンツェンベルクに注目したのである。さらにミュンツェンベルクの生涯の伴侶であったグロース（Gross, Babette）が、詳細なミュンツェンベルクの伝記を書いたのもこの時期である。<sup>(5)</sup>

その後社会主義革新の可能性をもった人物という従来の視角からではなく、プラグマティストとして捉えるズールマンの研究も登場したが、<sup>(6)</sup> ミュンツェンベルクが再び本格的に脚光を浴びるようになったのは、1989年の転換後である。グロースの回想録が、1989年に東ドイツの市民運動グループ系フォーラム出版社から再び出されていること自体、ミュンツェンベルクへの関心が高まっていることを示している。<sup>(7)</sup> ちなみにグロースは、死の直前だったにもかかわらず、旧東ドイツ秘密警察に反対するためのデモにベルリンで参加している。

同じミュンツェンベルクを、民主主義的社会主義というもう一つの社会主義の可能性として捉えるのはヴェッセルである。1990年になって書かれたそのミュンツェンベルク伝の中でヴェッセルは、ミュンツェンベルクを「過去数十年にわたってスターリン主義に歪められていた社会主義に対して、人間的で民主的なオルタナティブを見つけようとする際の鍵となる人物」<sup>(8)</sup>と位置づけている。また、ヴェッセルはミュンツェンベルクの死因について、自殺説をとっているが、これは、ヴェーバーの反論をひきおこすことになった。<sup>(9)</sup>

しかし、実はこれほどの人物であるにもかかわらず、ミュンツェンベルクの軌跡を追うことはさほど容易なことではない。ミュンツェンベルクのように、最後にコミンテルンに反対するようになった人物に対してソ連型社会主義はよくて低い評価しかあたえず、場合によっては、歴史上から消し去ってしまったからである。ミュンツェンベルクはむしろこうした「抹殺された人物（Unperson）」という人たちの中にはいる。歴史の空白ないしは「白い斑点（weiße Flecke）」なのである。例えば、ベッカーは旧東ドイツにおいて、IAHについて博士論文を書いているが、ミュンツェンベルクはIAHの指導者であったにもかかわらず、そこにはミュンツェンベルクの名前が数カ所に登場するにすぎない。<sup>(10)</sup> 旧東ドイツにおいては他の研究書でも、全く

無視されているか、よくて脚注などで登場するというくらいであった。したがって、例えば、ドイツ人民戦線の結成をめぐつても、一般的にはピークやウルブリヒトといった「統一戦線」派とセクト主義者との対立があったと描かれていたが、隠されたミュンツェンベルクなどの活動が明らかになれば、実際にはもっと複雑な経緯だったに違いない。こうした消された人物の発掘は、時間をかけてやらなければならない。

そこでここでは、ナチ政権の誕生した1933年から1935年くらいまでのミュンツェンベルクの活動を後付けながら、ミュンツェンベルクという人物の全体像を知るための片鱗を集める作業の一端としたい。

## 1. フランスへの亡命

ヴァイマル共和制末期の混乱のなかで、保守派が主導して事態を收拾しようとするあらゆる試みは結局破綻し、ついに1933年1月30日ドイツ大統領ヒンデンブルクは、ヒトラーを首相に任命した。<sup>(11)</sup> その議会内でナチは多数派を形成すべく、議会を解散し、3月5日に国会選挙が行なわれることになっていた。この選挙では、ドイツ共産党(KPD)の前進が予測されていた。その選挙戦の最中、1933年2月27日の午後9時15分頃、ベルリンの中心部でひときわ偉容を誇っていたネオ・バロックスタイルの国会議事堂から火の手があがった。この国会議事堂の外装は石材や煉瓦だったが、内部はほとんどが木製だったところから、燃え上がる炎は夜空を焦がした。この火事で議事堂は内部をほとんど焼失してしまった。<sup>(12)</sup>

すでに警戒体制にあった警察は、国会議事堂炎上の知らせがはいると、機敏に午後10時16分に「非常警戒体制」にはいり、作戦の実行にはいった。翌日2月28日には11500人の共産主義者活動家をはじめ社会民主党員、民主主義者が逮捕された。国会炎上事件はまさに、ナチ化を意味する「強制的同質化」の始まりののろしであった。警察は、炎上の際現場にいたオランダの「共産主義者」ファン・デア・ルッベ(van der Lubbe, Marinus)による放火と断定した。さらに、その数日後このルッベに指令したとして、ベルリンにいたブルガリア共産党指導者ディミトロフら3人も逮捕された。ミュンツェンベルクにも危機が迫っていた。33年3月2日のナチ機関紙『フェルキッシャー・ベオバハター』は、ミュンツェンベルクを「精神的指導者」と評し、彼の逮捕を急いだ。しかしこの時、彼はベルリンにいなかった。<sup>(13)</sup>

国会が炎上した2月27日当日、ミュンツェンベルクはフランクフルト・ア

ム・マインの東に位置するランゲンゼルボルトという小さな町で選挙演説をしていた。ミュンツェンベルクが演説会場を後にして10分後、ナチの突撃隊がミュンツェンベルク逮捕のために会場にやってきた。間一髪であった。真夜中すぎになって初めて、事態を知ったミュンツェンベルクは、知人をたよってダルムシュタット郊外、つづいてザールブリュッケンに身を隠し、フランスへの亡命の機会をうかがった。このザールブリュッケンで、ミュンツェンベルクは「ヒトラーはしっかりした地歩を保っている。彼の体制は長くつづくだろう。何年も、おそらく、8年とか10年覚悟しなければなるまい。戦争なしに倒されるかどうか誰がわかるだろうか」と洩らしていたと言う。<sup>(14)</sup>

しかし、KPDは永らく、ヒトラー政権を許してしまった自らの過ちを認めようとしていなかった。逆に、ヒトラーの勝利は、「労働者階級の弱さの証拠というだけでなく、……議会とブルジョア民主主義という古い方法では、もはや支配できないブルジョアジーの弱さの証明でもある」<sup>(15)</sup>と楽観的見通しを崩していなかった。それどころかむしろKPDは、マリア・レーゼ (Reese, Maria) という国会議員を、党から1933年末に除名している。彼女は、クララ・ツェトキン (Zetkin, Clara) と交流があり、1931年にSPDからKPDに移ってきた人物だった。除名理由の一つは、彼女が「ドイツ労働者の『恥ずべき敗北』という絵空事」を表明し、「ドイツ労働者階級の底力に対する根強い不信」をもっているからだとされた。<sup>(16)</sup>

たしかに、ヴァイマル共和国時代のKPDは、これまでも度々半非合法や非合法状態に追い込まれたが、しばらくすると、また活動を許された。こうしたことに対する〈慣れ〉があったとすれば、ヒトラー政権下でも比較的短期のうちに再びKPDは合法的に活動できるようになるという期待がKPD幹部の間にあっても不思議ではない。しかし、今回だけはどうやら事態が違っていた。1933年3月3日にはKPD議長テールマン (Thälmann, Ernst) が、そして3月9日には、後にコミンテルン第7回大会で「歴史的」報告をすることになるディミトロフが逮捕されたのである。

生涯の伴侶であったグロースによると、実はこの時ミュンツェンベルクが迷わずパリを目指したのは、それ以前に、コミンテルン指導者の一人ピヤトニツキー (Pjatnitzki, Ossip) から、もしもの時には、パリに行くように指示されていたからという。<sup>(17)</sup> それに、ミュンツェンベルクにとってもフランスは未知の土地ではなかった。アムステルダム・プエリエル運動を始めとする反戦運動の活動家として有名で、アムステルダムで設立された「戦争とファシズムに反対する委員会 (Comité contra la Guerre et le Fascisme)」

主催の集会を1932年9月3日、パリのビュリエール・ホールでもったから、その数ヵ月前からミュンツェンベルクは度々フランスを訪れていた。1932年12月にもう一度、同じ反戦委員会の指導者作業会議出席のためにパリ入りしていた。むしろフランス政府当局からミュンツェンベルクは「フランスの敵」、「危険なアカの手先」と見なされていたから、滞在許可がおりそうにもなかった。しかし、同時に反戦活動を通して知合ったフランス急進社会党代議士ベルジュリー (Bergery, Gaston) が、首相のショータンにはたらきかけた結果、閣議決定でミュンツェンベルクの入国禁止は撤回され、政治亡命が認められた。<sup>(18)</sup>

ミュンツェンベルクの反戦運動を通じた交際の広さは確認しておく必要がある。フランスにおける戦争に反対する運動は多くのリベラルなインテリ層を共産党に近付けた。とくに大衆的モード雑誌『モードの園 (Jardin des Modes)』の所有者の一人、ヴォゲール (Vogel, Lucien) と親交をむすんでいたことが大きな意味をもっていた。つまりヴォゲールのサロンで、数多くの政治家やジャーナリスト、フランス中央官庁の官僚やロシアの亡命者、ソ連大使館員たちと遭うことができたからである。そして同じヴォゲールを通して知合ったのが、フランスにおけるジェネラル・モータースの弁護士で、急進社会党の代議士であった、先のベルジュリーだった。

ともかく、こうしてドイツでの迫害から逃れて、ミュンツェンベルクのフランスでの活動が始まった。しかし、後日1938年4月15日、後の東ドイツの指導者にもなるウルブリヒトがミュンツェンベルクを追い落とす時に、このことも問題とされた。「私が記憶している限りでは、国内で活動していた党政治局が採択した、ミュンツェンベルクが党に知らせることなくドイツを去ったことに反対を表明した1933年の決議がある。」<sup>(19)</sup>

## 2. 亡命活動の開始

当時パリは亡命活動の一大中心地であった。1933年5月15日ミュンツェンベルクの、ある友人への手紙では、「パリは亡命者の街になった。毎日数百人が到着している。ここで全てが出会う。今日までに約4000人がやってきた」と言われるほどである。<sup>(20)</sup> そのパリでミュンツェンベルクが手懸けた最初の仕事は、ナチによって壊滅させられた左翼系出版物を再建することであった。

周知のように、ヴァイマル期ミュンツェンベルクは、「ミュンツェンベルク・コンツェルン」という異名をもつ、一大左翼出版コンツェルンをもって

いた。そこでミュンツェンベルクは次々と斬新な試みを実行していたのである。それまでの新聞というと、教養市民層を対象とした活字が多く、ドイツ文字を使い、難解な文章が綴られていた。それに分厚く値段も高かった。広範な労働者に読まれなかったことだけはたしかであろう。ミュンツェンベルクがうちだしたのは、これとは逆に、ページ数を少なくし、イラストや写真を入れ、視覚に訴えるような、その際、写真家ジョーン・ハートフィールドに代表されるような新鋭のスタッフを使い、モンタージュ技法など当時の最新技術を駆使した。しかも価格は普通の新聞の数分の1。従来の新聞のイメージを大きく変える現代日本の写真週刊誌にも似た「革命」だったが、その内容といえば、コミニズム、反戦平和などを訴えるものであった。これに労働者が共鳴したのは想像に難くない。その中でも、写真やイラストを中心とした『労働者イラスト新聞』は非常にポピュラーだったし、安価で読みやすさを売り物にしていた朝刊『朝刊・ベルリン (Berlin am Morgen)』、夕刊『夕刊・世界 (Welt am Abend)』その他評論誌『赤色建設 (Rote Aufbau)』などが有名であった。

「大衆宣伝の技法と能力では、陣営こそちがえ、ヒトラー体制を支えた同国人、ヨーゼフ・ゲッベルス宣伝相といい勝負だし、大衆向けの事業展開に見せた辣腕ぶりは、イギリスの新聞王ビーヴァブルック卿や、ゴランツなどを凌ぐものがある」という評価はまんざら誇張でもない。<sup>(21)</sup>

ミュンツェンベルクのパリでの活動は、ベルリンでのこうした彼の出版活動の継続を図ることであった。たしかに、『労働者イラスト新聞』こそ、プラハで週刊のまま発行が続けられたが、全体的な出版の中心となったのは、むしろパリの方であった。まず『赤色建設』の編集長だったザウアーランドや彼の友人フェストマンは、1933年1月1日から『赤色建設』の後継誌発刊の準備にかかり、1933年5月1日に隔週刊『われらの時代 (Unsere Zeit)』創刊号が発行された。印刷はドイツ国境に近いシュトラスブルグで行なわれた。また、フライは、自分が編集していた『朝のベルリン』をベルリンからパリにもってきた。彼に協力したのはエッセンの『ルールのかどま (Ruhrecho)』の編集長アブシュであった。この二人にミュンツェンベルクが加わって編集されたのが、週刊新聞『反攻 (Gegenangriff)』である。この『反攻』というタイトルは、ゲッベルスの『攻撃 (Angriff)』をもじったものである。この『反攻』は33年5月1日に創刊され、まず隔週刊で、その後週刊となり、そして1936年まで発行が続けられたが、この新聞がしばらくのあいだ、ミュンツェンベルクの鋭いナチ批判の中心舞台となったので

ある。<sup>(22)</sup>

また反ナチ出版物の中心となる出版社も創設された。「意見交換出版社 (Edition du Carrefour)」という名のこの出版社は、ベルリンのフランス大使館時代からミュンツェンベルクと付き合いのあるフランス外務省の広報局長コメールから強力な支援を得ながら、1933年から37年の間に34冊の本を出版したのであった。<sup>(23)</sup>

こうしたミュンツェンベルクを中心とした活動について、1933年4月22日付けナチのスパイ報告では「シュトラスブルクにおける共産主義出版社の開設」では、「熱狂的に」ファシズムに反対する政治宣伝が用意されているが、「その中心は依然としてミュンツェンベルク、バルビュス、ロマン・ローランを囲むサークル」で、ミュンツェンベルクは「またしても」こうした活動に「できるだけ超党派的印象を与えようとして」いる、と報告されている。<sup>(24)</sup> また33年5月2日「外国における出版に関するミュンツェンベルクの活動」という報告書の中でも、「ミュンツェンベルクは、ザール・ブリュッケンから、見せ掛けは『朝刊・ベルリン』や『夕刊・世界』のような形のドイツ語の超党派的出版物を組織しようとする目的を追求している」と、ミュンツェンベルクの活動は旺盛でナチも注目していた。

こうした「ミュンツェンベルク・コンツェルン」の再建がパリで順調に進められていた時、ベルリンから衝撃的なニュースが伝わってきた。1933年5月10日にベルリン国立オペラ劇場前でナチが「非ドイツ的」と見做された本を燃やすという焚書事件が起こったのである。「この真っ暗やみの文化的野蛮への逆戻りは、政治的敵対者に対するナチのテロについてのニュースより以上に、外国においては人々を動揺させた」とグロースが指摘しているほどその反響は大きかった。<sup>(25)</sup> とりわけドイツ・インテリゲンチャーの目には、本とともにドイツ文化自体が火に焼かれるとうつつたのも無理はない。それに、この事件は、ドイツ人は野蛮であるという古くからある偏見を十分に助長するものであったから、パリのドイツ亡命者の危機感は相当なものだったに違いない。

こうしたナチの焚書に対して、焚書の憂き目にあった著作をむしろ積極的に集めて残そうとしたのが、ドイツ自由図書館 (Deutsche Freiheitsbibliothek) であった。その創設を呼びかけたのは、ハインリヒ・マン (Mann, Heinrich) やその他亡命ドイツ人であったが、その中にミュンツェンベルクもいた。<sup>(26)</sup>

その外にも、ミュンツェンベルクはパリを中心に、次々と精力的にさまざま

まな団体の結成に活躍した。当時の仕事仲間、小説家ケストラー（Koestler, Arthur）がその有様を「奇術師が帽子から兎を取り出すように、ヴィリーは次々と委員会を作り出した」と指摘しているのはおもしろい。<sup>(27)</sup> たしかに、こうした組織が結成されていく際、ミュンツェンベルクらしいという点で重要だったのは、それまでの彼の活動の中で培われた人脈を如何なく巧みに利用した点であった。「いつもと同じようにミュンツェンベルクは、主にできるだけ有名なジャーナリストや学者、その他の協力を利用している。つまりそれらの人々は、彼個人的にというだけでなく、IAHの中央委員会とも共感するような人々なのである。」<sup>(28)</sup>

ちなみに、ケストラーは後述する「ドイツ・ファシズム犠牲者救援世界委員会（Welthilfskomitee für die Opfer des deutschen Faschismus）」創設の模様を次のように書いている。「まず手始めに彼は、『ドイツ・ファシズム犠牲者救援世界委員会』を設立し、欧米各地に支部をおいた。慈善団体の仮面をかぶり、どの国でも、イギリスの公爵夫人とかアメリカのコラミストとか、フランスの科学者とかいった、非の打ち所のない人物を委員にそろえた。これらの人びとは、ミュンツェンベルクの名など聞いたこともなく、コミンテルンなどゲッベルスの妄想だと考えていた。

この国際的名士をずらり並べた『世界委員会』が、十字軍の中核となった。国際的に知られた、アンリ・バルビュスとかホールデンとかいった人たちは例外として、共産主義者が委員会と公的な関係はもたぬよう、細心の注意が払われていた。だが実は、委員会の運営に当たるパリ事務所は、ほかならぬ共産党の細胞であった。」<sup>(29)</sup>

こうした広範な大衆性をミュンツェンベルクの指導する組織がもっていたことは重要である。彼の交際網の広さは驚くべきである。1927年に設立された「帝国主義に反対し、民族独立のための同盟」や「戦争とファシズムに反対する同盟」はミュンツェンベルクによって作られたが、そこでは、アインシュタイン、宋慶齡、ネールなども執行部の中に入っていた。ミュンツェンベルクにあっては、こうした人脈が運動の組織化にあって如何なく発揮されたのであった。<sup>(30)</sup>

ここでミュンツェンベルクらの仕事ぶりを垣間みてみよう。ミュンツェンベルクは、33年3月にパリ中心街のモンドトゥール通りに引っ越してきて、ここをしばらく根城とした。ここには、IAH フランス支部があった。そこから後述するようなライブツィヒ裁判に対する攻撃をミュンツェンベルクは指導したのであった。

「ミュンツェンベルク一党の間に流れる雰囲気は、革命家としての同志意識と慈悲深い独裁君主の周辺に集う廷臣たちの妬み心。この2つの奇妙に入り混じった感情であった。ドイツの党内の例にもれず、職員は皆、事務所の掃除婦も運転手も含めて（彼らもまた難民の党員だったが）、ボスを呼ぶ時には、『ヴィリー』とか『あんた』とか言った。格式張った応待などなく、職階上、年令上の差別も表向きには存在しなかった。手当ては、皆（表向きは）ヴィリーを含めて同一だった。『党员手当の上限』つき1500フランである。もちろん必要経費の名目で、支給額は違っていたし、官庁会社に見るような、権力のピラミッド型は、厳として存在していた。ヴィリーはお世辞に動かされる男ではなく、おべっかなど大嫌いだったけれど、それでも皆、彼に反対したり、機嫌をそこねたりしないよう、気を遣っていたし、彼の気分には左右されていた。タンクが壁を突き破るようにして彼が悠然と入ってくると、我々は皆彼の顔を見つめ、きょうは晴れか嵐かと判断した。その辺は、ブルジョア企業の従業員の場合と変わらない。

当時ヴィリーの『腹心の部下』は、伴侶のパベット・グロース。副官のオートー・カツツ。それに『三銃士』——秘書のアンスト、運転手のエミール、ボディガードで雑用を担当するユップ。この5人だった。』<sup>(31)</sup>

### 3. 『褐書』とロンドン対抗裁判

ミュンツェンベルクが次々と関与していった組織の中でも特筆すべきは、「ドイツファシズムの犠牲者世界救援委員会」である。この世界救援委員会については、「IAHはまだ存続していたものの、世界救援委員会は、方法と機能という点において、IAHの後継団体」といわれるほど、IAHと結びつきが強かった。<sup>(32)</sup>

実際に、「ドイツファシズムの犠牲者世界救援委員会」もIAHのフランス支部長長年亡命者としてパリに在住していたハンガリー人カローリー伯が提案して創設されたという形になっていた。本部はロンドンに置かれ、会長はイギリス労働党員でイギリス上院の副議長を務めるマーレイ。アインシュタインやフランスのランジュヴァンは、名誉議長に就き、書記として活動したのは、労働党員で国際フェビアン協会会員であったドロシー・ウッドマンであったというように、超党派的性格を有した組織であった。そしてこの組織が「短期間のうちに西ヨーロッパにおける反ファシズム宣伝の中核になった」<sup>(33)</sup>のであった。

全世界の関心は国会炎上事件に集まっていた。このミステリアスな事件とその結果はとりわけ世界の目をドイツに引き付けた。だから、ミュンツェンベルクがこの事件と裁判に彼のヒトラーに反対するプロパガンダの集中砲火を浴びせたことは巧妙な戦略だった。このプロパガンダの頂点になったのが2冊の『国会炎上とヒトラーのテロに関する褐書 (Das Braunbuch über Reichstagbrand und Hitler-Terror)』(以下『褐書』)の発行とロンドンでの対抗裁判だった。とくに『褐書』は、「最も反響のあった出版物」<sup>(34)</sup>、「最初の有名な出版物」<sup>(35)</sup>とされる反ナチ宣伝書であった。ミュンツェンベルクの腹心であったカツ (Katz, Otto) が、とくに国会炎上事件の追跡調査を指導した。この作業を手伝ったグスタフ・レーグララーの自伝には、「我らの事務所はあたかも、難破した人が辿り着く一つの島のようであった。彼ら全てが彼らなりのやり方で手伝ってくれたのである」と述べられており<sup>(36)</sup>、事実、『褐書』の資料は、主にドイツから逃れてくる政治亡命者やユダヤ人亡命者ないしは、ドイツ国内のKPDの地下組織から蒐集された。

こうして集められた資料をもとに、『褐書』では国会炎上事件に関連して、この事件を共産主義者迫害の口実にしたナチの論拠を2つの方向から崩そうとした。つまり、一つは、容疑をかけられているルッベが本当に共産主義者だったのか、ということであった。この論拠が崩れれば、国会炎上を共産主義者の蜂起のろしとして、共産主義者を逮捕していった論拠は失われてしまうのである。

カツはオランダのジャーナリストといっしょに、ルッベの出身地であるオランダで彼の追跡調査をすることにした。そして調査の結果、ルッベが「オランダ・レーテ共産主義」という小さな無政府主義グループに所属していて、この組織を通じて「一般労働者連合」のベルリンの友人とコンタクトをもっていた、としたのである。いずれにせよ、ルッベとKPDとはつながっていなかった。尋問でもルッベが共産黨員かどうかは質問されていない。

『褐書』のもう一つの仮説は、国会議事堂が国会議長ゲーリングの住まいと地下でつながっているということである。このことは、事件に対するナチの関与を強く匂わせ、この国会放火事件がナチの自作自演であることをアピールするものであった。このことについては、実は事件の2時間後に『ヴァイーン一般新聞』特派員フリッシュャウアーも言っていることであった。<sup>(37)</sup>

こうして『褐書』は各国版が出された。イギリス、アメリカ、フランス、チェコ=スロヴァキア、オランダ、スウェーデン、デンマーク、フィンランド、リトワニア、ポーランド、ルーマニア、スペイン、ソ連で、12ヵ国語で

出版され、ドイツ語版はバーゼルで印刷された。発行数は、中心となったドイツ語版とフランス語版を合わせて2.5万部程度で、12カ国全てを合わせて7万部程度であった。ドイツに持ち込まれたことは、1933年10月25日のヴェルテンベルグ内務省の報告にもあがっている。<sup>(38)</sup>

ミュンツェンベルクをはじめとするドイツファシズムの犠牲者世界救援委員会が、全世界から注目を浴びていた国会炎上事件に関して、『褐書』と並んでとり組んだのが、ロンドン対抗裁判であった。これは、国会炎上事件に関する裁判がライプツィヒで行なわれているのに対抗する意味合いをもっていた。そのライプツィヒ帝国裁判所においては、1933年9月21日から第4回公判が開かれることになっていた。被告はファン・デア・ルッペ、KPDの議員団長や選挙対策局長を務めていたトーグラウ (Torgler, Ernst)、1929年以降ブルガリア共産党外国指導部に従事し、その後「調停派的、右派的傾向」によって指導部から外されていたディミトロフ (Dimitroff, Georgi)、それに同じブルガリア共産党のポポフ (Popoff, Blagoj) とタネフ (Taneff, Wasil) の5人であった。そして、その裁判の正式の弁護人はザック博士という人物であった。彼は、ラーテナウ殺害裁判、ウルム国防軍将校裁判など、有名な右翼による犯罪裁判の右翼側の弁護人を担当していた。公正な裁判が行なわれるとは思えないとして、コミンテルンは共産主義に共鳴する弁護士をライプツィヒに送ろうとするが、ナチが拒否していた。<sup>(39)</sup>

こうした中で、コミンテルンには1933年夏ミュンツェンベルクがモスクワ滞在中、対抗裁判を組織することを提案し、コミンテルンはこの提案を受け入れた。その後IAHやドイツ・ファシズムの犠牲者世界救援委員会を中心に準備が進められ、ライプツィヒで第4回公判が始まる直前の9月14-18日にロンドンで対抗裁判が行なわれることになったのである。

イギリスでは、マーレイが作戦の中心になり、司法関係者や後のイギリス蔵相クリップス (Cripps, Sir Stafford) も支持することになった。1933年4月に発足した国会炎上事件調査委員会のメンバーの顔触れを見てみよう。

まず、裁判官を務めることになったのは、国際的裁判に活躍していた王室弁護士プリット (Pritt, N. D.) であった。その他委員会には各国から弁護士や法律関係者が参加した。米国からは公民権運動の先駆者で、サッコーとヴァンゼッティ事件の弁護士でもあったガーフィールド (Garfield, Arthur)、スウェーデンからは最初の社会民主党首相の息子で弁護士を務めていたブランティング (Branting, Georg)、フランスからは有名な弁護士で、元フランス国務次官のモロ・ジアフリとベルジュリー、その他デンマー

クやオランダ、ベルギーからも著名な法学者が参加していた。スイスからも当初国民議会議長のフーバー（Huber, Johannes）が参加することになっていたが、スイス議会が召集されたために参加できなくなった。こうしたそうそうたるメンバーは、全員大なり小なりミュンツェンベルクとの交流があった人ばかりであったが、ミュンツェンベルク自身は現われなかった。<sup>(40)</sup>

そして、ロンドン対抗裁判の日程は9月4日から19日までライプツィヒの裁判が始まる1日前に最終コミュニケ発表の予定になっていた。ロンドン対抗裁判の前に調査委員会のメンバーはオランダに赴き、16人の参考人を審問して、ファン・デア・ルッベの環境を調べた。そこで明らかになったのは、ルッベは31年4月5日まで共産主義青年同盟ないしはオランダ共産党にいたが、「個人行動と個人テロの傾向がある」として除名されていたことだった。彼は、労働組合や労働者政党を非革命的で改良主義的だと見做していた。

こうして、1933年9月15日、ロンドン対抗裁判、正式には「国会炎上事件にかんする国際司法調査委員会」の会議がロンドンの法律協会の会議場で開催された。クリップスの開会のことばで、委員会の任務は、起訴された共産党員の弁護のためにできるかぎり入手可能な資料を収集すること、とされた。ロンドン対抗裁判の場には有名な社会民主党員も登場した。SPD 国会議員であったヘルツ（Hertz, Paul）やグルジェジンスキー（Grzesinski, Albert）、ブライトシャイト（Breitscheid, Rudolf）、ベルンハルト（Bernhard, Georg）といった指導的社会民主党員も委員会の調査に応じた。こうした調査の結果、最終日9月18日に委員会は次のような最終コミュニケを発したのである。

「委員会は調査の結果次のような結論にいたった。

1. ファン・デア・ルッベは共産党のメンバーではなく、その敵対者であったこと。共産党と国会炎上事件のあいだの関係をしめす痕跡はないということ。被告であるトーグラウ、ディミトロフ、ポポフ、タネフは、容疑をかけられている犯行に無罪というだけでなく、直接ないし間接にもこの犯行との関係がないこと。
2. 委員会の手元にある文書、証言とその他の資料から一致して確認できるのは、ルッベが単独では犯行を起こせなかったことを示しているということ。
3. 国会議事堂からの出入りの可能性を調査すれば、放火犯は国会議長宅から国会議事堂に通じる地下通路を利用したであろうということをかなり確認できるということ。この火事が起こったということが問題となる時期に国民社会主義党に有利にはたらいたということ。これら、ないしはこの報告書の

第3部に記された理由からは、国会議事堂は国民社会主義ドイツ労働者党の指導的人物が直接ないしはだれかに委託して放火されたと疑う重大な理由があること。委員会は、あらゆる法にのっとり、裁判機関にこの容疑を調査させること。

もしも、ライブツィヒにおける裁判中ないしその後、ライブツィヒで提示された事実とすべて判明する事実を吟味しそれをもとに再度報告書を用意すべき委員会を再度開催する必要と認められたときは、委員会を再び召集することに全力があげられる。」<sup>(41)</sup>

ケストラーは、この時の模様を次のように記している。「私がパリに着いたとき、決闘の第一ラウンドに勝っていた。ナチは追い詰められていた。…ナチの敗北とわれらの大勝利、被告席に座っていた共産主義者に対して無罪判決がセンセーショナルに下されたのはもっぱら一人の男の天才のおかげである。そしてその男とは、ヴィリー・ミュンツェンベルクであった。ヴィリーは、世界的規模の反ファッショ十字軍の黒幕、いや赤幕であって、見えない組織者だったのである。」<sup>(42)</sup>

#### 4. 人民戦線への胎動

こうしたロンドン対抗裁判の成功の余波は大西洋を越えた。合衆国では、ロンドン対抗裁判に関与していたジバルティがロンドンの対抗裁判を真似た対抗裁判をニューヨークで開こうとしていた。そして実際に7月2日に「ドイツ・ファシズムの犠牲者のための世界救援委員会」によってニューヨークでそれは開催されたのである。これと前後して1934年7月、ミュンツェンベルクは20日間にわたってアメリカ中を演説してまわったのであった。

ミュンツェンベルクの演説旅行は、ドイツ社会民主主義者クルト・ローゼンフェルト (Rosenfeld, Kurt) やイギリスの労働党の議員でもあったベヴァン (Bevan, Aneurin) を同伴するものであった。講演はニューヨークをはじめ、シカゴ、デトロイト、クリーヴランド、ボストン、ワシントンにおよび、その地域のドイツ人クラブや社会主義者、労働組合の主催で講演会が開催されたのである。マディソン・スクウェア・ガーデンではデモにまで発展した。ドイツ外務省はこうしたミュンツェンベルクの活動に抗議したが、アメリカ政府は、4週間の特別ヴィザをミュンツェンベルクに与えた。<sup>(43)</sup>

このアメリカ訪問は、これまででもミュンツェンベルクが追求してきたものを、さらに加速させることになった。それは、この頃から台頭してきた人民

戦線の発想と行動であった。その手始めとして、すでにアメリカ訪問中から展開していたテールマン釈放運動を、本格的に旺盛に繰り広げていくことになるのである。テールマンはKPDの議長で、当時ナチに拘束されていた。このテールマン釈放運動によって、テールマンは単なるKPDのシンボルというだけではなく、国際反ファシズム運動のシンボルとなっていくのであった。アメリカからパリに帰ると早速に、ミュンツェンベルクは、『反攻』に、テールマン釈放運動はアメリカで国民運動にまでなっている、「我々は、ヒトラードイツにおいて、政治的に別の考えをする人の全ての拷問や迫害の即時中止とナチスの地獄から全ての政治犯、すなわちあらゆる“テールマン”の釈放を要求する」と書いている。<sup>(44)</sup>

こうした一連の運動の成功の要因をケストラーは、ミュンツェンベルクがKPDの党内闘争にまきこまれず、党路線の懸案事項を用心深く避けていたことと、コミンテルンから伝統的に「かなりの程度独立性」を有していたこと、さらには、「党官僚の統制が麻痺したために」「党の公式出版物の矮小でセクト主義的タームとは対照的に」いかになくミュンツェンベルク・コンツェルンを総動員して創造力豊かな宣伝活動を展開したことに求めている。<sup>(45)</sup> さらにこうしたミュンツェンベルクの活動様式は、コミンテルン指導部とりわけ、1924年以来執行委員を務め、1939年にはスターリンの粛清の犠牲となるピヤトニツキーによっても評価されていた。

しかし、一般的に当時の共産党 — コミンテルンとミュンツェンベルクの関係は微妙なものであった。実際、ケストラー自身、「共産党の官僚たちは、ヴィリーを憎んだだけではない。ヴィリーに味方する者をも、『ミュンツェンベルクの一堂』と呼んで、嫌った。この外部からの圧力が、ヴィリー周辺の人びとを団結させ、『党内党』とも言うべきものを形成させる結果となった。」<sup>(46)</sup> と述べているし、グルーバーも、「ミュンツェンベルクの党内における位置はユニークで、半ば自主的立場 (semi-autonomous status) で、むしろ共産党の側からは少なくとも歓迎されていなかった」と記している。<sup>(47)</sup>

さらにミュンツェンベルクが特殊な位置を占めていたことは、ナチによってさえ理解されていた。つまり、1933年4月22日付けナチのスパイ報告では、「熱狂的に」ファシズムに反対する政治宣伝が用意されているが、ミュンツェンベルクはその際「政治的党指導部ないしはコミンテルンから離れて」活動していると報告されている。<sup>(48)</sup>

「たしかに彼はまだ共産主義者であり、彼の演説や論文にはそのことが明らかに出ていたが、彼の政治的活動の全てはいまや一つのテーマ、つまりヒ

トラードイツに反対する闘争だけに収斂していった」といったグロースの発言は貴重である。<sup>(49)</sup> ミュンツェンベルクは、1989年に民衆の打倒の対象となるコミニズムのある負の一面と無縁であった。ミュンツェンベルクは反ファシズムのためであれば、党派を越えて行動をともにした。民主的党派の結集というマルクスの『共産党宣言』の原点がそこでは大事にされていた。実はこうしたミュンツェンベルクの本領が発揮されるのは、ブルーラルな思想の共存を前提とする人民戦線の中においてであった。当時、時代は人民戦線の時代であった。<sup>(50)</sup> 時代がミュンツェンベルクを要求していた。しかし、それは同時に様々な軋轢を伴うものであり、結局ミュンツェンベルクはコミンテルンとの絶縁、謎の死へと進まざるをえなかった。そうしたプラス、マイナスを含めて時代は人民戦線へと流れこんでいくのである。こうした人民戦線期のミュンツェンベルクの行動については稿を改めて論じたい。

## 注

- (1) 青年インターナショナルの活動家で、戦後、東ドイツでも指導的立場に立つことになったクレラは、1930年コミンテルンの立場から青年インターの創立の模様を書いているが、(Kurella, Alfred, *Gründung und Aufbau der Kommunistischen Jugendinternationale*, Berlin o. J.[1930].) これに対する実質的な反論としてミュンツェンベルクが書いたのが、*Die Dritte Front, Aufzeichnungen aus 15 Jahren proletarischer Jugendbewegung*, Berlin 1930. である
- (2) 水谷三公『ラスキーとその仲間』中公叢書 1994年 47頁。
- (3) Koestler, Arthur, *The Invisible Writing*, London 1969. (甲斐弦訳『ケストラー自伝 目に見えぬ文字』彩流社 1993年、401頁)
- (4) Kersten, Kurt, *Das Ende Willi Münzenbergs, Ein Opfer Stalins und Ulbrichts*, in: *Deutsche Rundschau*, 83 (1957), S. 484-499.
- (5) Gross, Babette, *Willi Münzenberg*, Stuttgart 1967. この期の主なミュンツェンベルク研究には、Schleimann, Jorgen, *The Organisation Man, The Life and Work of Willi Münzenberg*, in; *Survey, a Journal of Soviet and East European Studies*, 55, April 1965, pp. 64-91; Gruber, H., *Willi Münzenberg, Propagandist for and against the Comintern*, in: *International Review of Social History X*(1965), pp. 188-210. Raddatz, Fritz, J., *Erfolg oder Wirkung, Schicksale politischer Publizisten in Deutschland*, München 1972. がある。またシュルツは、ミュンツェンベルクの主な著作を部分的にはあるが復刊している。Schulz, Til (Hrsg.), *Willi Münzenberg, Propaganda als Waffe, Ausgewählte Schriften 1919-1940*, Frankfurt 1972.
- (6) Surmann, Rolf, *Die Münzenberg-Legende, Zur Publizistik der revolutionären*

*deutschen Arbeiterbewegung 1921–1933*, Köln 1983.

- (7) Gross, Babette, *Willi Münzenberg, Eine politische Biografie*, Leipzig 1991.
- (8) Wessel, Harald, *Münzenbergs Ende, Ein deutscher Kommunist im Widerstand gegen Hitler und Stalin, Die Jahre 1933 bis 1940*, Berlin 1991, S. 7.
- (9) Weber, Hermann, “*Weisse Flecken*” in *der Geschichte*, 2., *erweit. Auflage*, Frankfurt 1990.
- (10) Becker, Rolf, *Die Internationale Arbeiterhilfe in Deutschland 1921–1933*, Diss., Potsdam 1973.
- (11) ヒトラー政権誕生にいたる過程について、主に保守勢力との関連から論じた最近の研究として、石田勇治「ヴァイマル共和国の崩壊と保守エリート」藤原彰・荒井信一編『現代史における戦争責任』青木書店1990年 245–266頁。熊野直樹「ヴァイマル末期におけるドイツ国家国民党」『現代史研究』第38号1–17頁、があげられる。
- (12) しかし、実はこの火事の前にすでに、ベルリンの警察総監の政治警察プロイセン州作戦部長ルドルフ・ディールは「予期される共産主義者の陰謀と蜂起に対する対抗措置として共産主義活動家を逮捕すること」を各警察署に無線で連絡していた。この命令は、ベルリンでは KPD の「全中央委員会メンバーを逮捕する」という形となって伝えられた。国会議事堂が燃える6時間前のことである。*Der Reichstagsbrandprozeß und Georgi Dimitroff, Dokumente, Bd. 1*, Berlin 1982, S. 20.
- (13) 同じ1933年3月2日のナチ機関紙『フェルキツシャー・ベオバハター』は、国会放火事件後、すぐに占拠された KPD 本部、カール・リープクネヒト・ハウスから押収された書類の中に、ミュンツェンベルクが「井戸への毒物の投入」を計画していたという証拠があったとしていたが、1933年8月11日に出された正式の逮捕礼状には、容疑として「反逆準備罪」をあげている。Bundesarchiv Abteilungen Potsdam (BAP) St 4/8, Bd. 1, Bl. 195.
- (14) Gross, S. 358, 362.
- (15) J. W. Stalin, *Rechenschaftsbericht an den XVII. Parteitag am 26. 1. 1934*, in: *Fragen des Leninismus*, Moskau 1947, S. 522.
- (16) *Der Gegen-Angriff, Antifaschistische Wochenschrift*, Nr. 17 vom 12. 11. 1933.; Herbert Wehner, *Zeugnis, Persönliche Notizen 1929–1942*, Köln 1985, S. 88.
- (17) Gross, S. 251.
- (18) Gross, S. 365.
- (19) *Einige ergänzende Feststellungen zu den Behauptungen von Münzenberg*, in; *Zentralparteiarchiv der Partei des Demokratischen Sozialismus (ZPA)*, NL 36/515/614–616. ミュンツェンベルクが気にしていたのは、ベルリンの彼の事務所や住居であった。当面の資金も必要であった。そこでミュンツェンベルクは、比較的顔の知られていないグロースをベルリンに偵察に送り込むことにしたので

ある。ベルリンのIAHやミュンツェンベルクが関係していた「ミュンツェンベルク・コンツェルン」の出版社や印刷所は、全て警察に占拠されていて、近付くことができなかった。

しかし、こうした最悪の事態を予想して実はミュンツェンベルクは2年前からある非常措置を準備していた。すなわち、ミュンツェンベルクは、2年前からベルリンのロシア領事であったアレクサンドロフスキーに、毎月一定額、出版社の収益から彼の金庫にしまいこんでもらっていたのである。当初こうした計画をモスクワ外務省は拒否したが、アレクサンドロフスキー領事は古参のボルシェヴィキで、ミュンツェンベルクをよく知っていたのでこの非常措置に理解を示した。今や非常事態が現実のものとなった。グロースは細心の注意を払いながら領事から金庫の中の金を受け取ったのであった。Gross, S. 363.

- (20) Gross, S. 371. この期の亡命者に関する研究者であるグロスマンによると、ドイツから外国に逃れた亡命者の数は1933年12月現在で、全部で5.9万人いたが、そのうち42.4%にあたる約2.5万人がフランスに亡命していた。Grossmann, Kurt-R., *Emigration, Die Geschichte der Hitler-Flüchtlinge 1933-1945*, Frankfurt/M. 1969, S. 151. Röderによると、全亡命者6万から6.5万のうちフランス滞在は2.75万人であった。Röder, Werner, *Die deutsche sozialistischen Exilgruppen in Großbritannien 1940-1945*, Hannover 1968, S. 15.
- (21) 水谷三公 47頁。
- (22) Gruber, S. 191. しかし、こうした『統一(Einheit)』、『自由青年(Freie Jugend)』などこの時期ミュンツェンベルクが名づけた出版物の名前が、第二次世界大戦後東ドイツで出版物名として使用されたのは興味深い。
- (23) Schleimann, p. 75. この『意見交換出版社』という名前と事務所は、スイス人からミュンツェンベルクは買収した。Langkau-Alex, Ursula, *Volksfront für Deutschland? Bd. 1*, Frankfurt 1977, S. 51.
- (24) Mikrofilm Institut für Zeitgeschichte, MA 644, S. 867150.
- (25) Gruber, S. 370.
- (26) 委員会メンバーはハインリヒ・マン、フォイトヴァーグナー、シュヴァルツシルト、グンベル、ブライトシャイト、オルデン、ルードヴィヒ、トラーであった。
- (27) ケストラー 401頁。
- (28) Mikrofilm Institut für Zeitgeschichte, MA 644, S. 867150
- (29) ケストラー 253-254頁。
- (30) Gruber, S. 193. グルーバーに言わせれば、ミュンツェンベルクは、「常にドイツにおける共産主義者の模範的組織者としての名声を博した。」Gruber, S. 188. とくにネルーとの交流は、度々その後も繰り返された。ヴェッセルによれば、ネルーは1955年バンドン会議の開会演説の中で、ミュンツェンベルクについてふれ、初期の反植民地解放運動における彼の功績を讃えたとされる。Wessel, S. 304.
- (31) ケストラー 265頁。腹心のオットー・カッツは、以前ベルリンのピスカトール劇場のマネージャーであった。Gruber, S. 190.

- (32) Ursula, S. 54. 1933年3月 IAH 中央委員会付「ドイツ救済委員会」本部は、アムステルダム、エランズ通り (Elandsstraat) 33番地。雑誌『行動 (Die Aktion)』を発行していた。Ursula, S. 53.
- (33) Gross, S. 369.
- (34) Gruber, S. 191.
- (35) Schleimann, S. 76.
- (36) Regler, Gustav, *Das Ohr des Malchus*, Köln 1958, S. 215.
- (37) Gross, S. 369. 「ルツベは同性愛の性向をもち、同じ性向をもつナチの高官と交わっていた」と『褐書』の中ではなっている。さすがにこの点に関しては、この後オランダの逮捕者の友人たちが名誉を傷つけられたとして、1933年『赤書』を出して、これがでっちあげであると主張した。いずれにせよ、この頃の政争で、相手を追い落とすために同性愛者だというレッテルは、ナチ、反ナチを問わず利用された。しかし、この行き着く先がナチの強制収容所における同性愛者の抹殺だったことに疑いの余地はない。(Grau, Günter, *Homosexualität in der NS-Zeit*, Frankfurt 1993.)
- (38) Gross, S. 380. 旧東ドイツにおいてこの『褐書』の評価は非常に難しかったにちがいない。というのも、『褐書』自体は、共産主義者が積極的に関与した反ファシズム運動史上画期的な出版物であるものの、その中心は後にコミンテルンやKPDの敵対者として登場するミュンツェンベルクだったからである。
- したがって、東ドイツのこの部分にふれた箇所の説明は苦しい。そこでは、後の東ドイツ時代に党の幹部として上昇していったアブシュの功績が異常に高く評価され、むしろ、『褐書』の功労者というべきミュンツェンベルクは、ほとんど無視されているのである。
- ちなみに、東ドイツでこの『褐書』がリプリントされたのは1980年だったが、原著者はおろか協力者の名簿の中にもミュンツェンベルクの名前はなく、「当時まだ反共・反ソの立場に転落していなかった」ミュンツェンベルクは、「『褐書』の翻訳や印刷、販売にあたって重要な役割を果たした」としか書かれていない。(Antifaschistische Literatur in der Bewahrung, Bd. 2 Berlin 1980, S. 399.)
- 当のアブシュはさすがに自分の回想録の中でミュンツェンベルクを無視できず、『褐書』の原著者とはいっているものの、「気持ちのムラが大きく」政治的には信頼できない「資金調達者」とミュンツェンベルクを名付けている。(Alexander Abusch, *Der Deckname*, Berlin 1981, S. 324, 355.)
- (39) Gross, S. 383.
- (40) Gruber, S. 192.
- (41) *Der Reichstagsbrandprozeß*, Bd. 1, S. 228, 229, 302, 303; Bd. 2, S. 39.
- (42) Arthur Koestler, *Als Zeuge der Zeit, Das Abenteuer meines Lebens*, Frankfurt 1986, S. 194.
- (43) Schleimann, S. 78.
- (44) Gruber, S. 195. 1935年6月にはシュトラシユブルグで国際テールマン・デーが

開催される (Ursula, S. 56.)。1935年8月には、「ディミトロフ、テールマンそしてすべての投獄されている反ファシストの国際解放委員会」が発足し、名誉議長として、アンドレ・ジード、アンドレ・マルローをいただいた。釈放が要求された有名人は、テールマンと並んで、カール・オシエツキー、社会民主主義者カルロ・ミーレンドルフなどがあげられる。またこの期、第2の掲書『国会炎上裁判、ヒトラー・テロの第2の掲書』が発刊されたが、序章は釈放されたばかりのディミトロフが書き、「ナチの海外スパイ網とレーム事件について」、「60万人のユダヤ人迫害について」、「ドイツの軍備」、その他のテーマが扱われている。Schleimann, S. 76.

- (45) Wessel, S. 27.
- (46) ケストラー 265頁。
- (47) Gruber, S. 188.
- (48) Mikrofilm Institut für Zeitgeschichte, MA644, S. 867150.
- (49) Gross, S. 412.
- (50) 1934年の年末には、グロースとスペインに後にスペイン共和国の外相となるアルバレス・デル・ヴァヨ (Alvarez del Vayo) を私的に訪問するなど、ミュンツェンベルクは積極的にスペイン人民戦線を支援していた。Schleimann, S. 78.